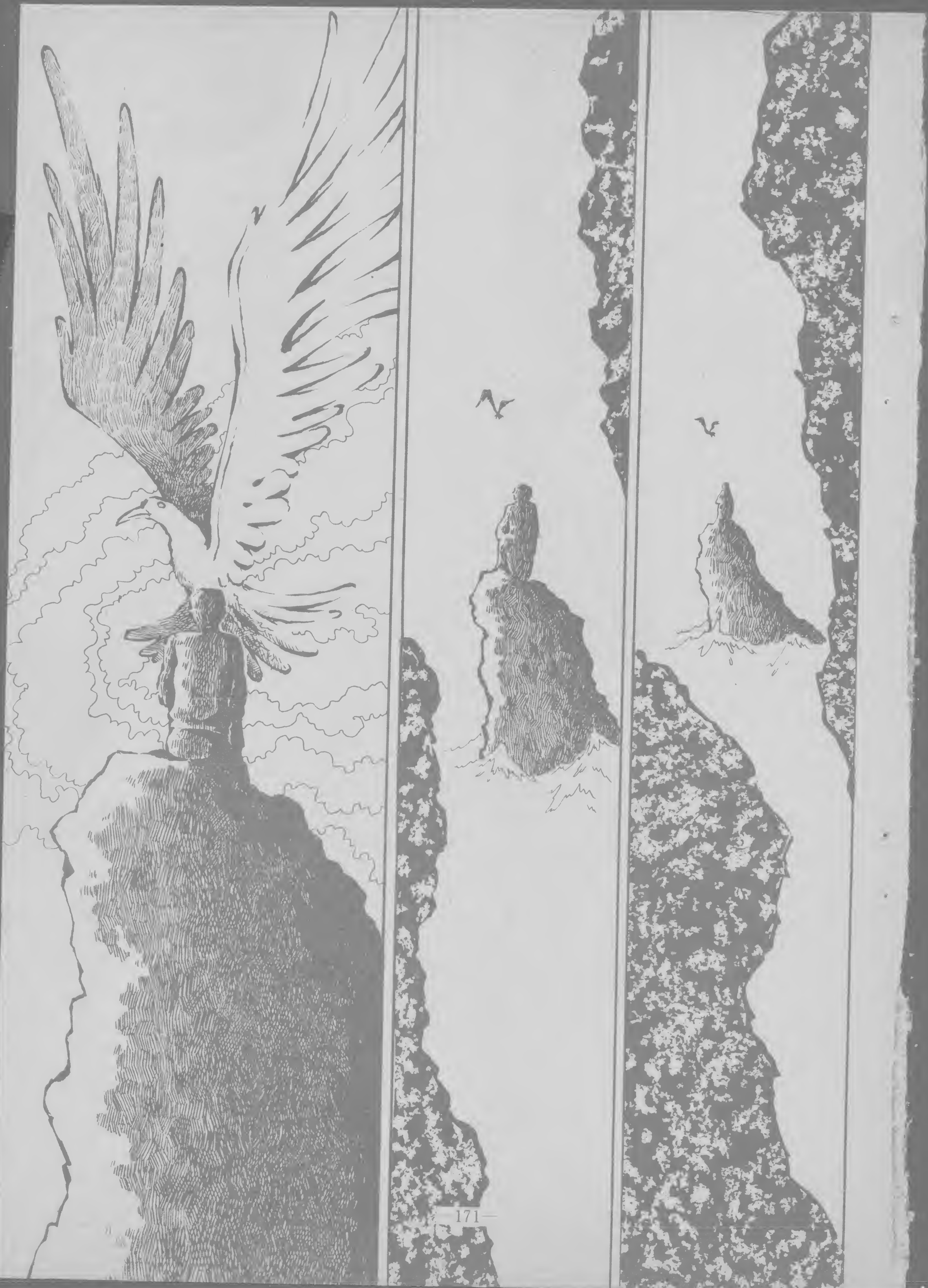
思えばとおく

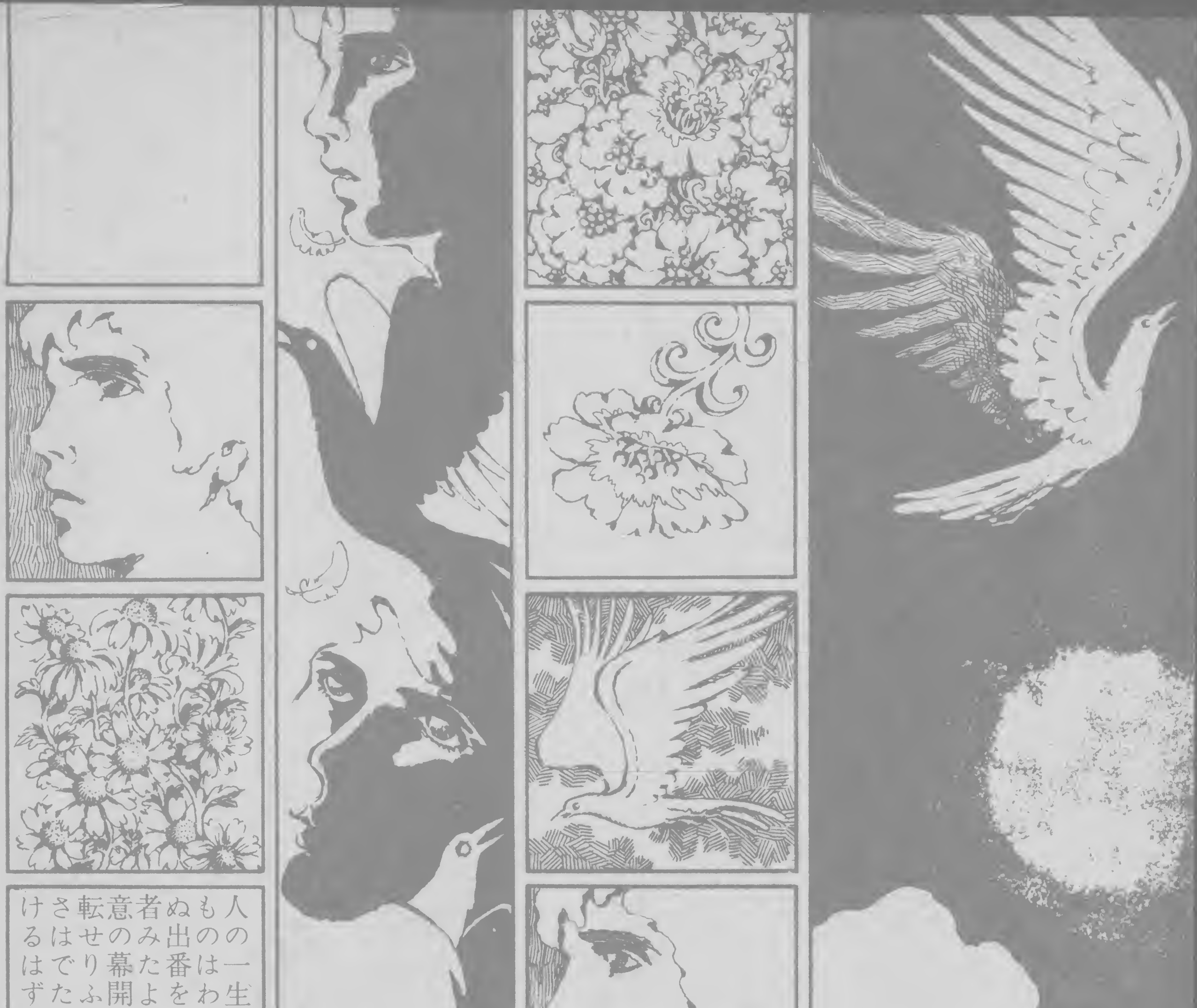
とうせはかなく散る宿命たれか知ろうか明日のわか身ご無礼さんとは知りながら軒下三寸借り受けまし
て相勤めます浮世の義理を果すあてないしかない心開いておくれか忙しい花可憐純のただ一途に思いつめ
たる胸のうちこぼす涙のひとしずく腹うち割ったるおのが真情嘘
偽りなど言えようはずもなしおまんまぬものをいかでかと
めんとは申したらものか早や暮れかかる西の空のはて…
煙るその向う今宵々
生のお別れと
羽をもか
れた鶴
羽か



ヒロヲ・サツ



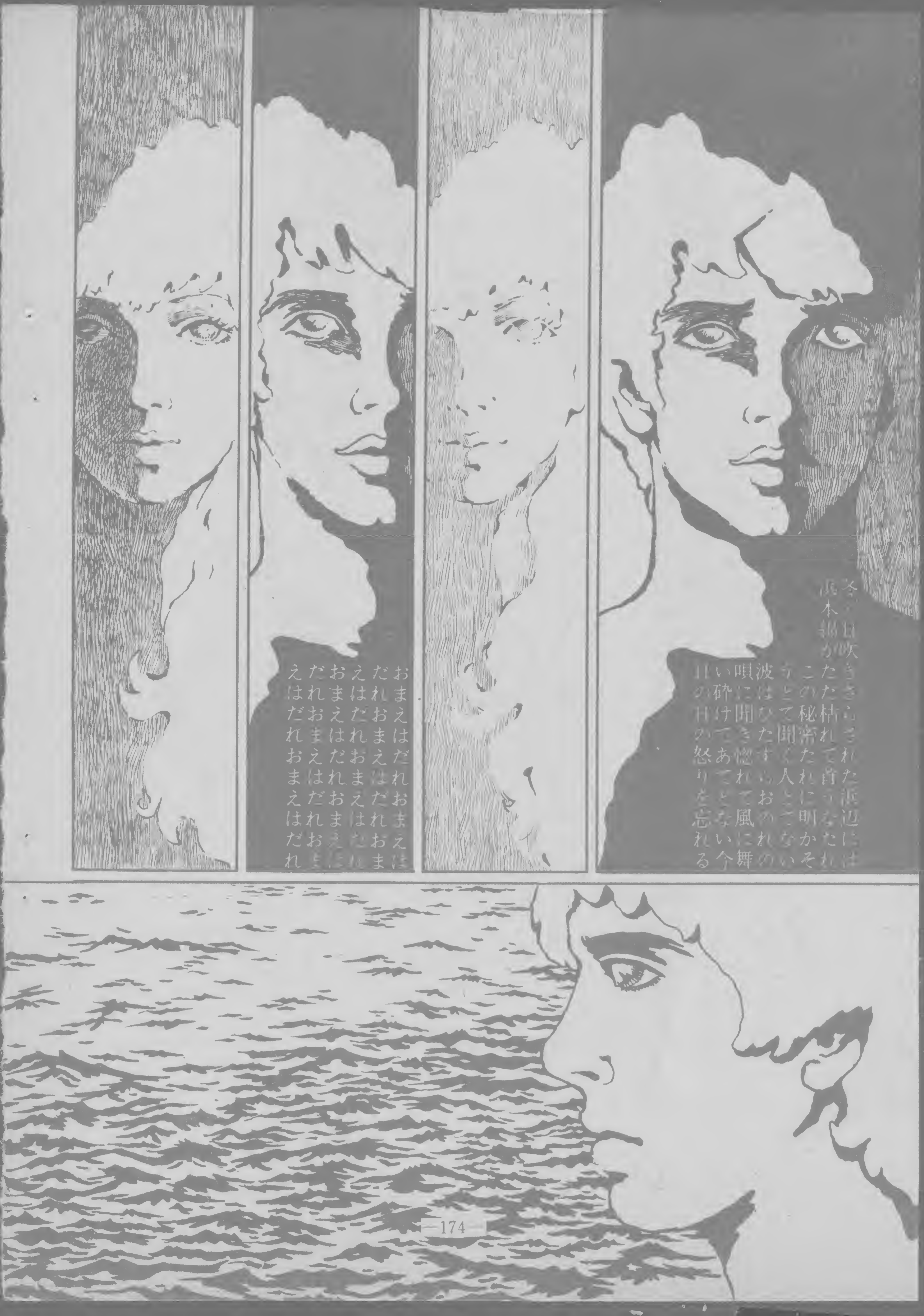



ええごめんください
ましおやだれかと思
つたら横丁の熊さん
いいお日和りでまあ
奥へあがつてくんな
おや出刃なんかもつ
てまさかあなた姿を
冗談でしようぎや人
殺しだ助けてくれえ
人の一生などという
ものはわけもわから
ぬ出番をふられた役
者みたようなもの不
意の幕開きに気も動
転せりふを忘れしぐ
さはでたらめ客にう
けるはずはなかろう

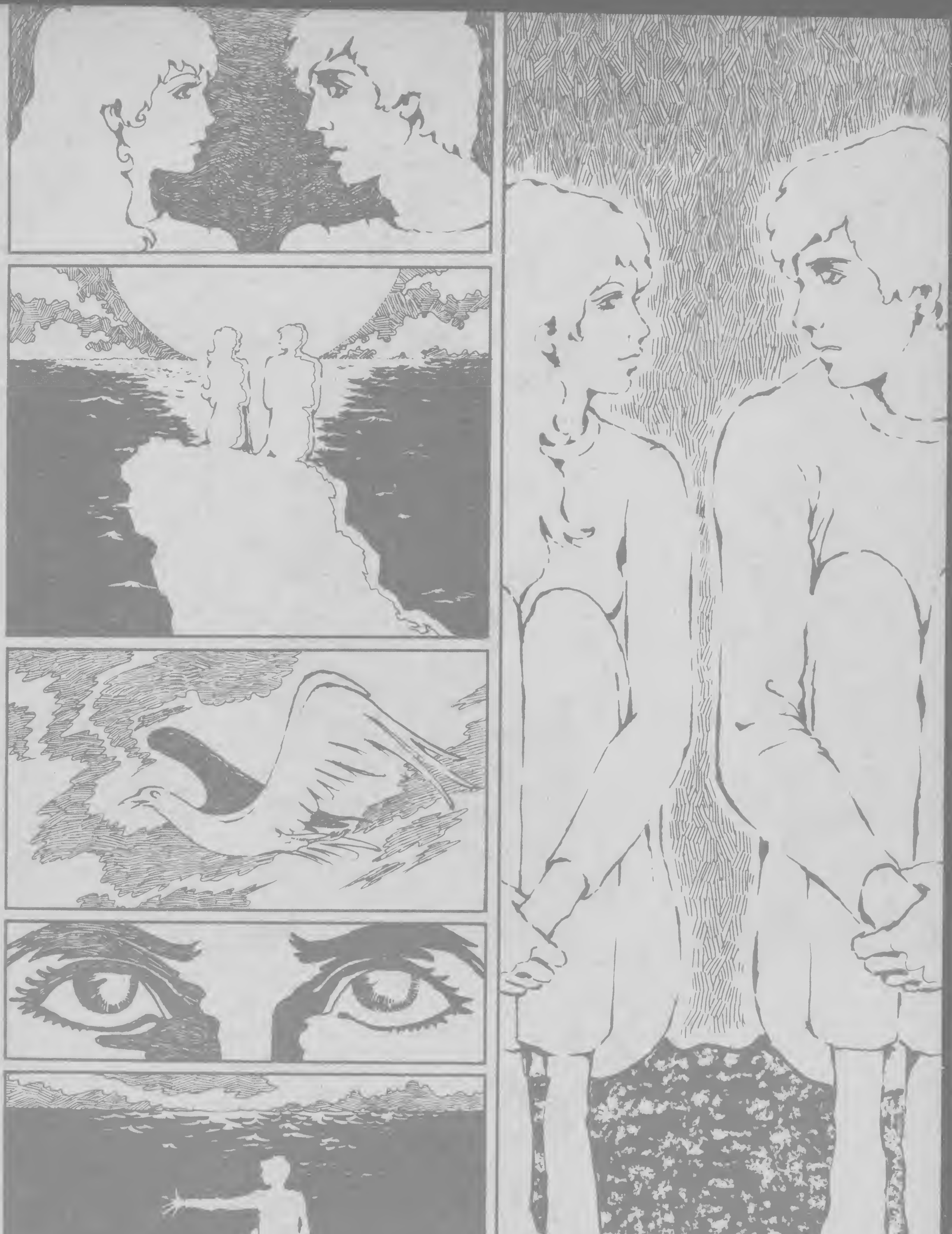


頃は元禄巳酉のことでございます花の都は東京の大目玉堀つてえますから今のながた町あたり佐藤団十郎という極道者がいたこいつのために泣かねえものがいないほど忌わしい存在

いまという時間が満ちた潮のように危機をはらんで喘いでいるとしたらただ黙つて明日のために生きるほかはない死者のたわ言に耳を借している暇などないのだ


冬・日吹きさらされた浜辺には
眞木錫かただ枯れて首うなだれ
この秘密たれに明かそ
うとて聞く人とてない
波はひたすらおのれの
唄に聞き惚れて風に舞
い砕けてあてどない今
日の日が怒りを忘れる
おまえはだれおまえは
だれおまえはだれおま
えはだれおまえはだれ
おまえはだれおまえは
だれおまえはだれおま
えはだれおまえはだれ


おまえはだれおまえは
だれおまえはだれおま
えはだれおまえはだれ
おまえはだれおまえは
だれおまえはだれおま
えはだれおまえはだれ

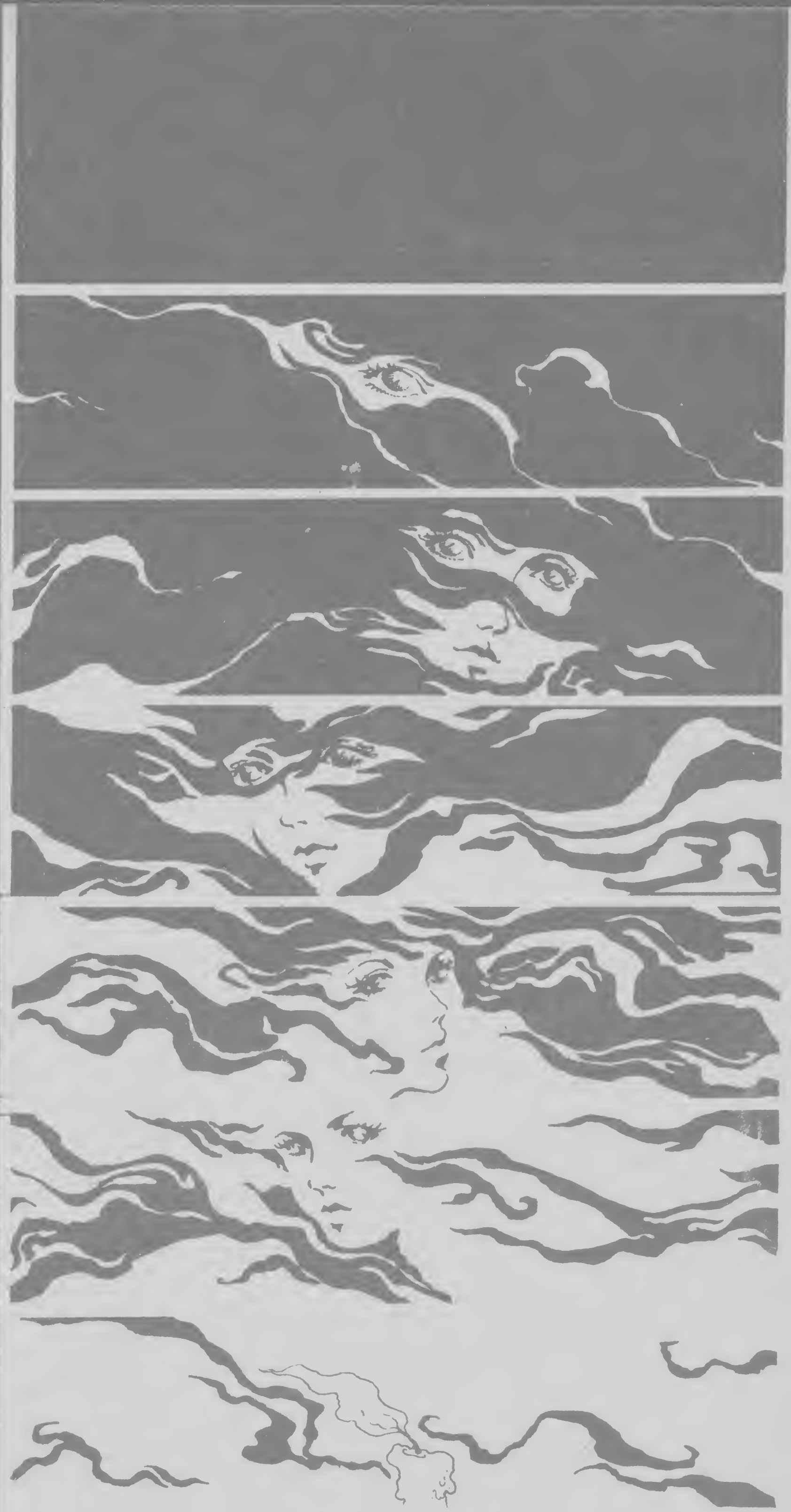




停車場には赤い帽子をかぶったおじさんがひとりいまし
たそれではさようならといって汽車に乗りました黒い旗
が星の中にひとつはたはたと鳴っていたのでほしいなあ
と思いました汽車は知らん顔してのんきに走っています



あれはきけんあれは夢でこそ思いは窮も
いずれ野の果て地の底駆けめぐって蛾をむしり
馬を追い牛を殺し馬を鞭打ち唾はきかけて哀
れを乞う心やすむ暇もなくつきかえつきそれ
からそれへ移りさまようおのが亡霊の髪ふり
乱した姿のおどろおどろしさ息をのみ恐怖に
さらされいまさら訝しげな顔し風にたわむれ
ぬほどの邪気はないかがみに向かいただただ
あてもないつかの間の浅い眠りだけをあわい
入色の闇にちさけぬ陽のをかで待つはかり







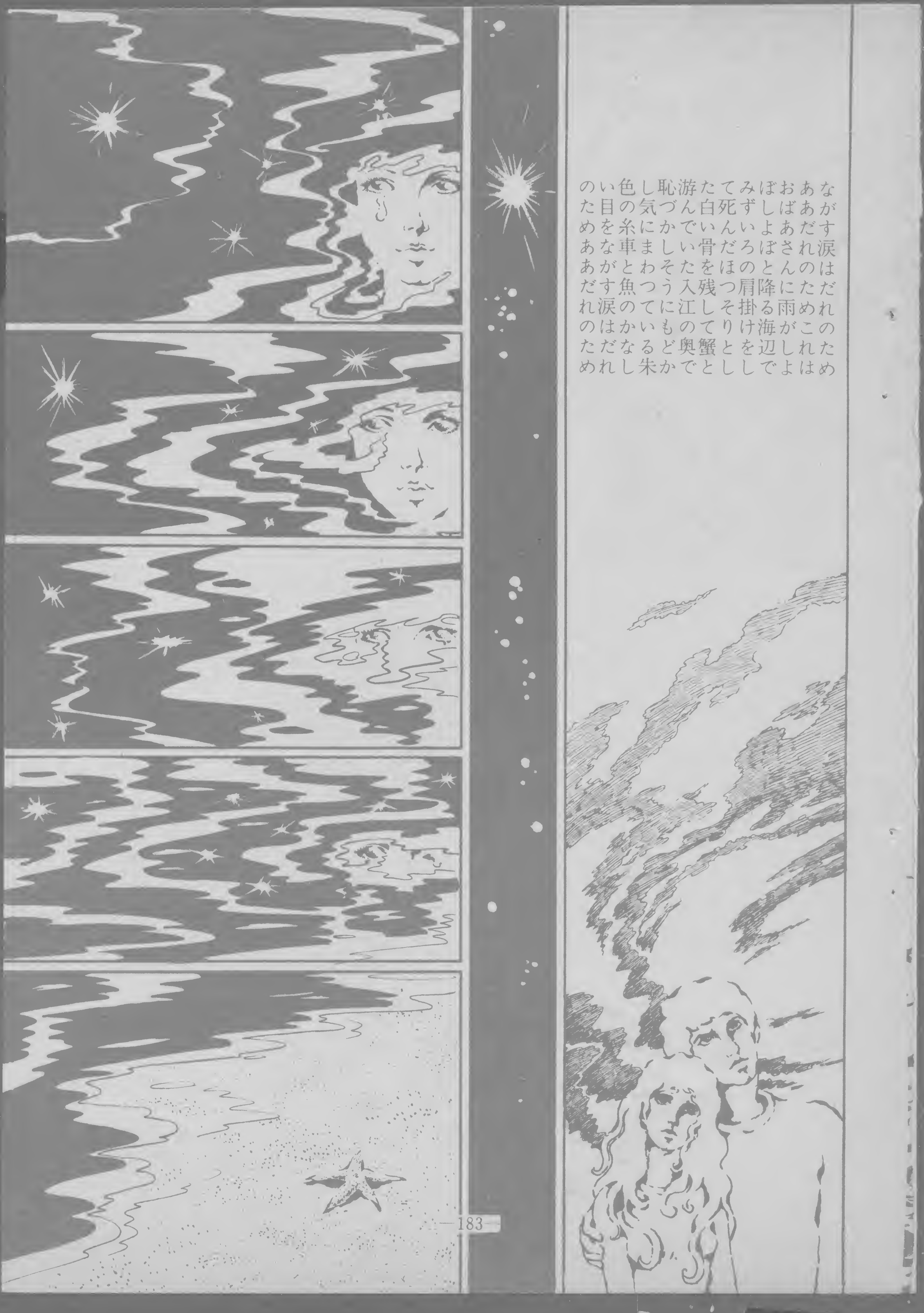


燃えるような、夏がきた



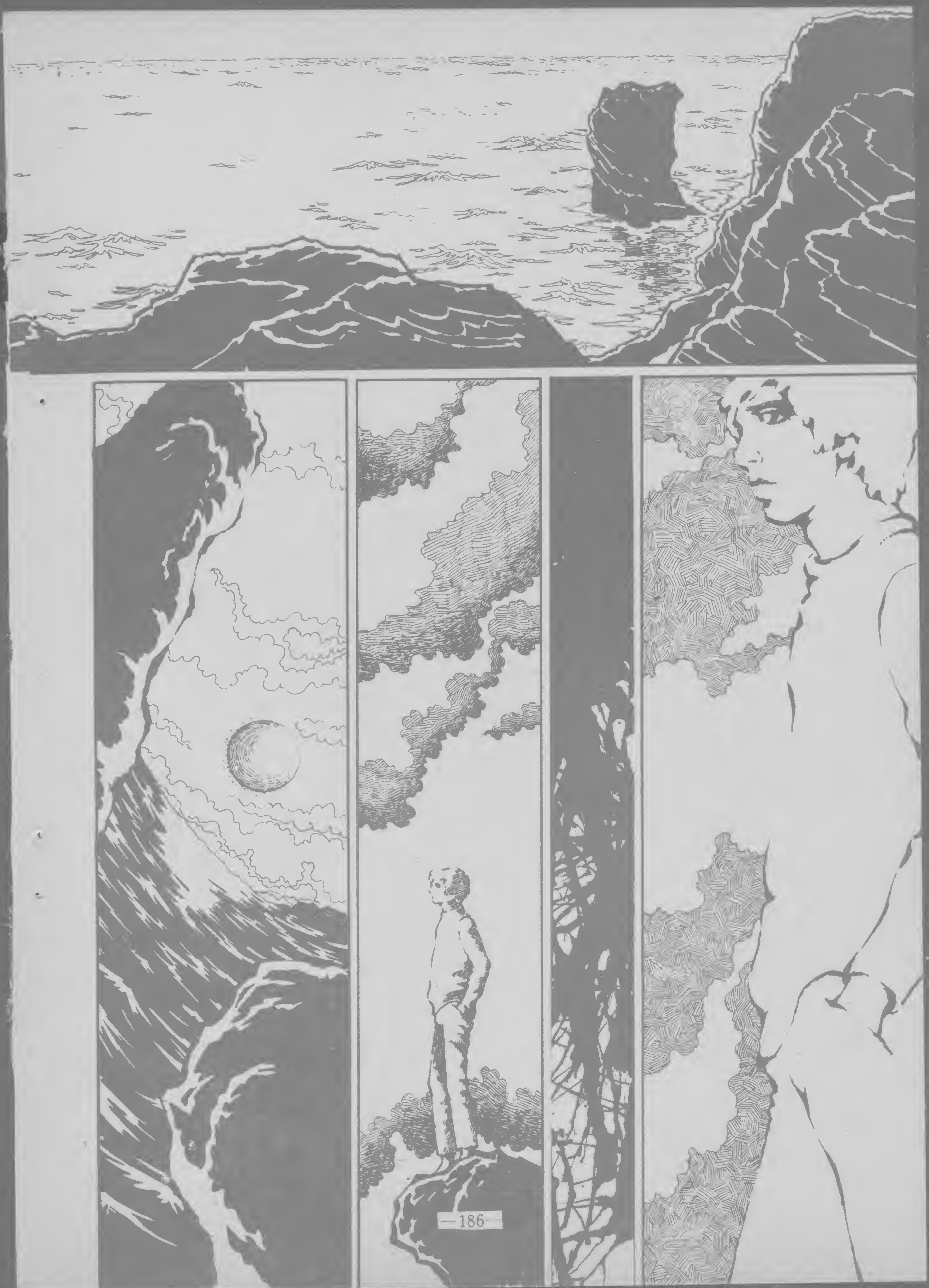




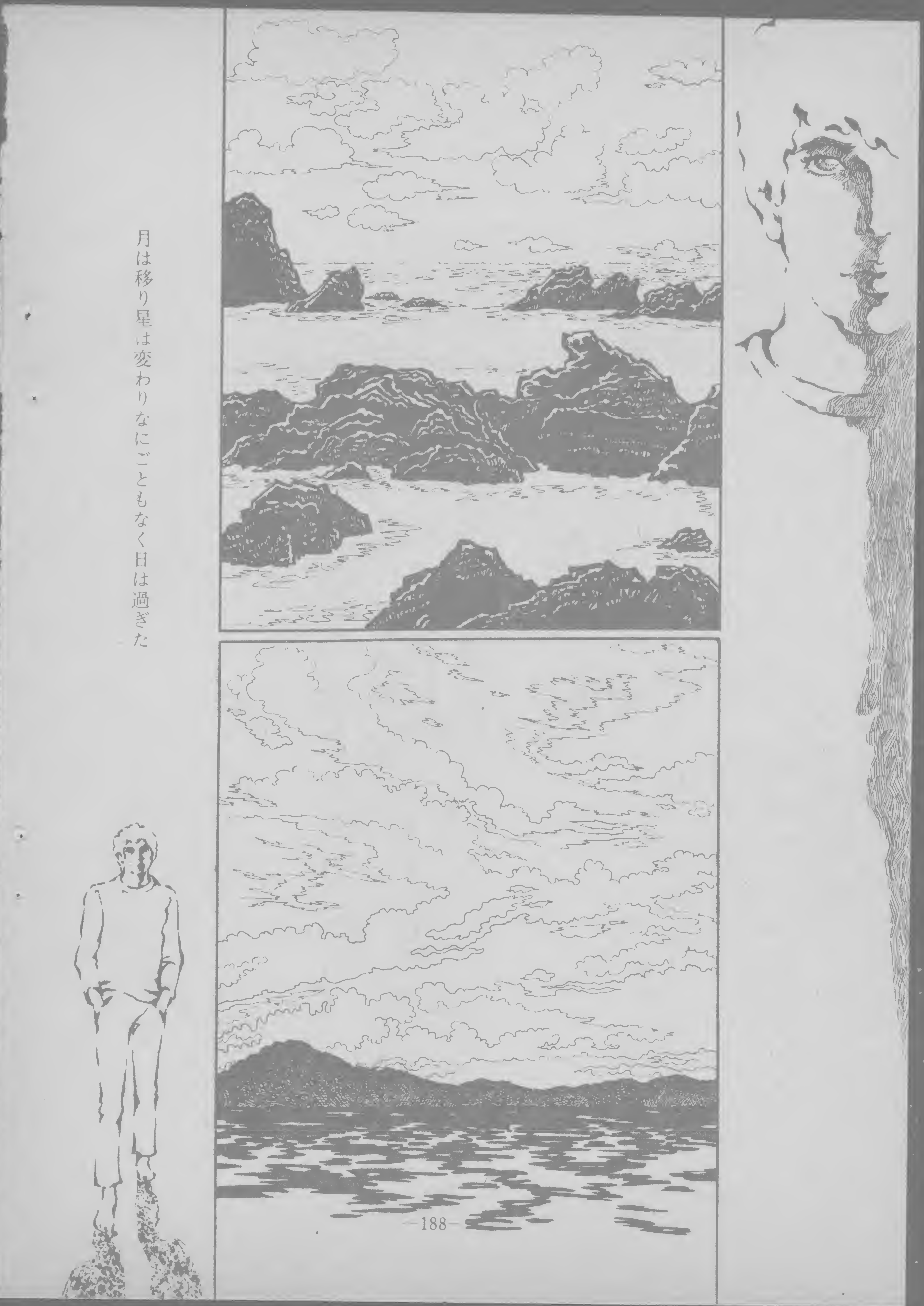

ながす涙はだれのため
ああだれのためこれは
おばあさんに雨がしよ
ぼしよぼと降る海辺で
みずいろの肩掛けをし
て死んだほつそりとし
た白い骨を残して蟹と
游んでいた入江の奥で
恥づかしそうにもどか
し気にまわつている朱
色の糸車と魚のかなし
い目をながす涙はだれ
のためああだれのため








よつつにたたんでやつつ
に折つて一寸きざみの五
分きざみに朱に染めた真赤
な空にいずれ匕首呑みこ
ませ狂気の沙汰は知れた
こと血を見ないではこの
胸納まらずいらぬ横車は
怪我のもとこの期に及ん
で騒いだところで馬耳東
風蛙のつらに小便洞ケ峠
を決めこむとは太え量見

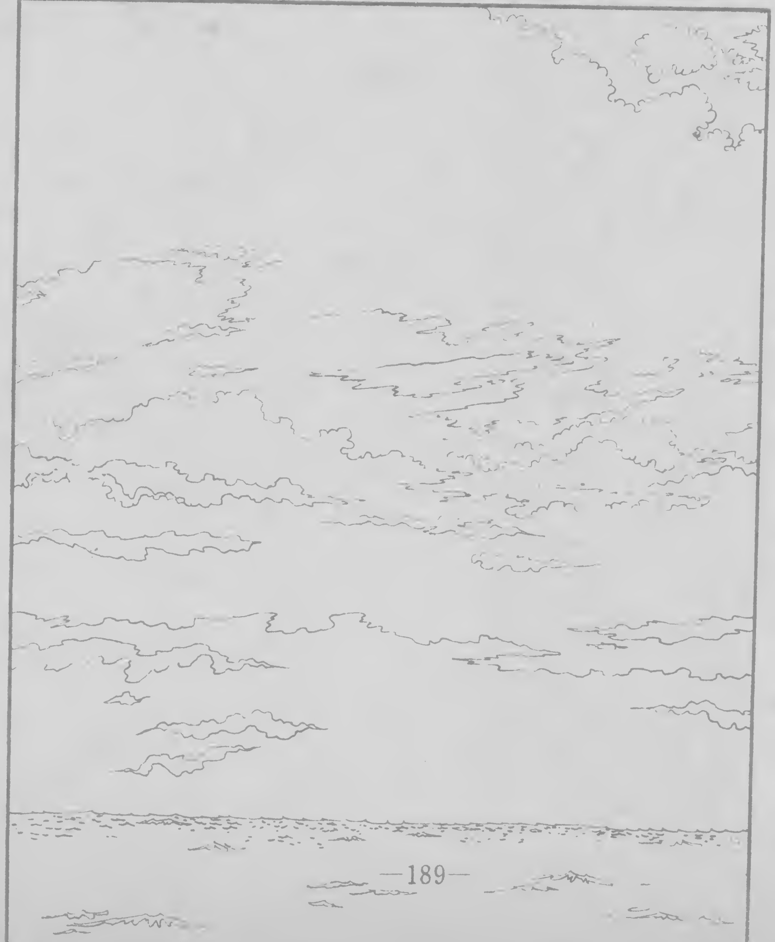

月は移り星は変わりなにごともなく日は過ぎた



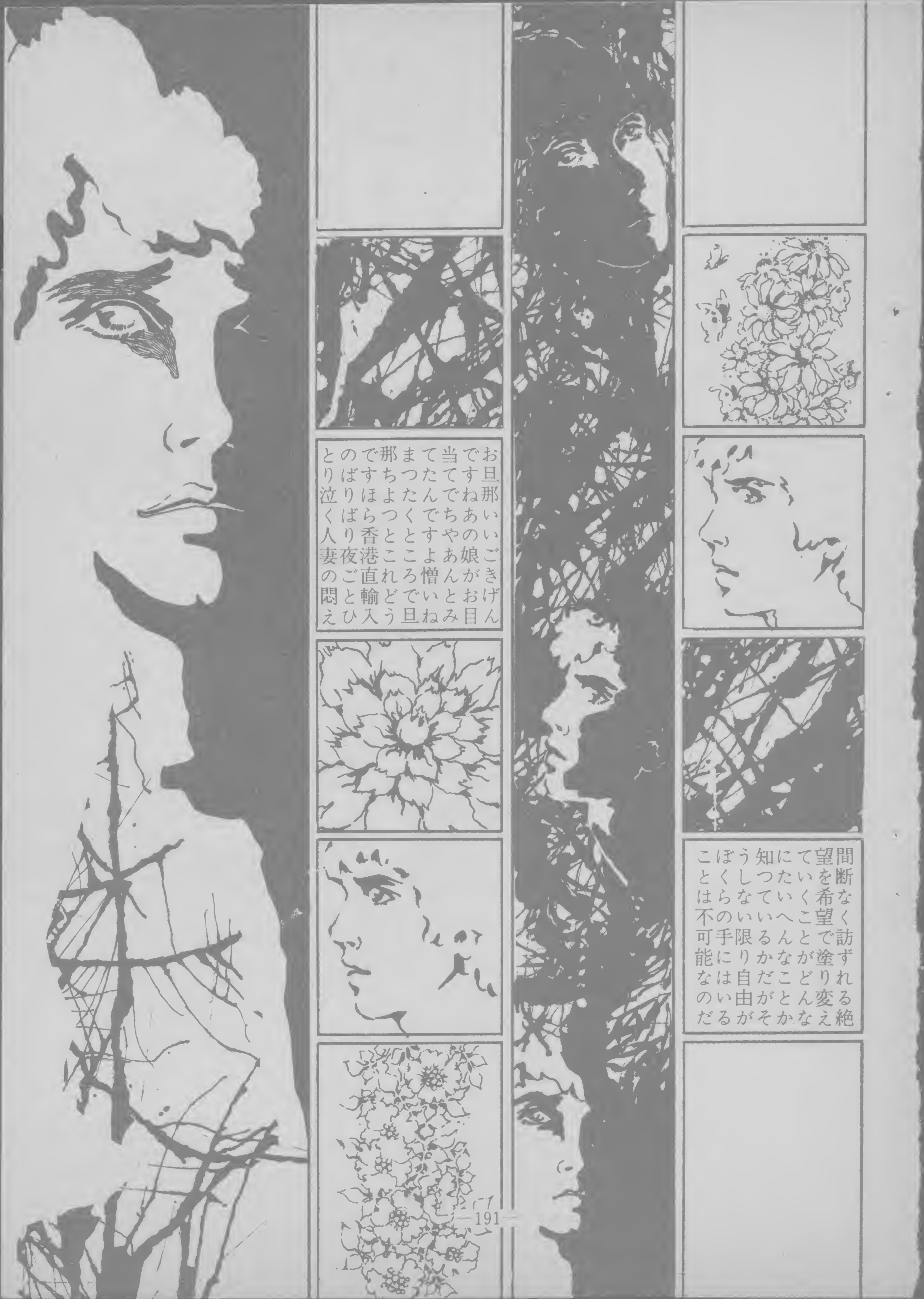


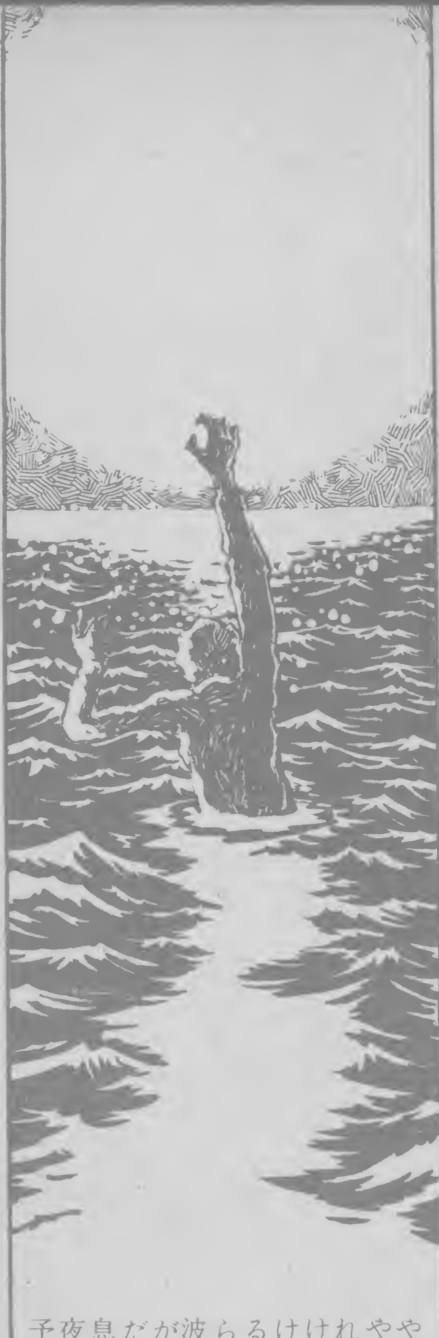
月は移り星は変わりなにごともなく日は過ぎたか






生れは九州熊本県の阿蘇のふもとの坊中で親の因果が子に報い生まれた姿この姿人間とは名ばかりのこの体顔はかわいいお嬢様ところが胴も足もなく鱗のひかる蛇そのものさどうだ
聞きたくないものは聞こえない人の耳なんてまったく便利にできてる妾が喚こうが叫ぼうがあの人は知らんぷり妾は疲れただ泣いている泣いてみるしか芸がない


お旦那いいごきげんですねあの娘がお目当てでちやあんとみてたんですよ憎いねまつたくところで旦那ちよつとこれどうですほら香港直輸入のばりばり夜ごとひとり泣く人妻の悶え
間断なく訪ずれる絶望を希望で塗り変えていくことがどんなにたいへんなことか知つているかだがそうしない限り自由がぼくらの手にはいることは不可能なのだ





やがて切子細工のような球体の夜明けがやつてくる突き刺さる灰色の痛みはとぎれることを知らず慄えておびえた目を向けるときがくるそして闇が喪服を身につけてしたり顔して隣りに坐るのだ聞こえるか新しい苦悩がちがう色をして立ちあらわれる瞬間に荒々しいしぶきをあげた波がしばらく休息しようとあたりをうかがう忘れろ忘れてしまえ淡いよどみがただよい亀裂が鼓動しているそれは戦いで息子をなくしてしまつた母親のかなしい夜明け年老いたひとりの男が自分の死を予感する残酷でいたましい夜明けなのだ







飛んでもないは百も承知だがそいつはまたとんと
聞こえぬお話記憶の糸はもつれて屑もおんなじと
くれば午前三時のめくらも同然なれというなら豚
にもなろう生きて死んで豚こそわが友わが味方と
悟つてはみたもののいささかこの世に未練もたん
まり芸者をあげてかつぽれ踊り茶をにごさなくと
も粋もからいも変りはないかみわけたつもりで生
きてはいるが切つたはつたがこの世のならい受け
た古傷さらりと忘れおもしろおかしく渡ろうより
ほかに術もなく暮れては明ける浮生の旅の一里塚




完